

子ども療養支援協会通信

Japanese Association for Child Care Support

Vol. 6

平成 25 年度子ども療養支援士認定コース修了式

平成 26 年 3 月 15 日、順天堂大学医学部にて、子ども療養支援士第 3 期生修了式を行いました。

今年は 5 名の子ども療養支援士が誕生しました。この 5 名はこの一年間、当協会の規定する要件を満たし多職種で構成された認定委員による審査を受け、子ども療養支援士として認定されました。この晴れの日を会場にお集まりいただいた理事、諮問委員、教育委員、会員の皆様で、お祝いました。修了生への祝辞と、5 名の修了生のご挨拶をご紹介します。



平成 26 年 3 月 15 日 平成 25 年度子ども療養支援協会修了式
(於:順天堂大学)

写真最前列左より、修了生 丸山里奈さん、蛭田悠子さん、小松朋子さん、小野山晶菜さん、大村えりかさん

祝辞 第 3 期修了生に贈る言葉

子ども療養支援協会会長 藤村正哲

1998 年に Cincinnati 小児病院を訪ねた時、Child Life 部門を訪問する機会がありました。その時案内して下さった主任の説明で「私達が No と言えば、小児科の医師はそれを尊重してくれます」という言葉が印象に残りました。「子どものために守るべきもののために CLS は働いている」というスピリットが感じられたからです。

小児病院の組織の中に No を尊重してもらえる関係を創り上げるために、それまでどれだけの勉強と経験、研究と実績、日常活動と意思疎通が蓄積されて来たのか、主任の言葉が示す年月と内容の深さに感銘を受けました。

子ども療養支援士の活動は、明日にも理解してもらえるような判り易いものだと思いついてはならないでしょう。でも怯んではいけません。あなたの活動はヒューマニズムに依拠し、最終受益者が子どものために為される仕事なのです。

修了生より「認定コースを修了して・今後の抱負」

子ども療養支援士 大村えりか
(順天堂大学附属浦安病院)

約1年間の認定コースを修了し、この春、子ども療養支援士に認定していただきました。私は現在、看護師として働きながら子ども療養支援士の資格を生かすという働き方を選び、前勤務先に今年の4月に復職しました。今の私を前に進ませてくれる原動力となっているのは、熱心に指導して下さったスーパーバイザーや共に支え合った同期、そして講義や他施設実習など多くの講師の方に支えられた1年間の研修でのたくさんの学びです。

4月から実際に現場で活動してみると、現実の壁の厚さは自分の予想をはるかに越えていました。大人の事情優先、業務効率最優先の現場では、子どもの権利が守られていない現状が当たり前になっています。その中でも、私にできることがあるとすれば、研修で学んだ医師や看護師とは異なる「子ども療養支援士の視点」から子どもを見て、改善すべきところに疑問を投げかけたり、声をあげていくことで、当たり前になっている現状にほんの少しでもいいので風穴を開けて子どもの権利を考えられるような雰囲気を作っていくことだと思っています。

小児医療の世界では、医師、看護師など、どのような形であれ、子どもと誠心誠意向き合っている方ばかりです。そのため、現場を変えたいと思っても、感覚や発想からの発言や感情論だけではやはり、受け入れてもらうのは難しいです。そこで、子どもの発達理論など子ども療養支援士の知識を根拠としながら、自分の意見を相手と【共有する】という姿勢が大切だと1年間の研修での学びを経て、現場で働きながら改めて感じました。現在、私はカンファレンスの時間や、日々の会話の中で、スタッフとコミュニケーションをとるようにしながら、「自分が変える」のではなく「仲間と変える」意識で、協力しながら日々活動できるように心がけています。

今後、「子ども療養支援士の視点を持つ看護師が増えればそれでいいじゃないか」という声が聞こえてくるかもしれませんが。しかし私はそうは思いません。忙しく働く医師や看護師とは異なる立場を生かし、一緒に遊んだり、子どもの目線を大切にしかかわる子ども療養支援士の存在に、子どもや家族は癒されるからです。日本の医療現場に誕生したばかりである子ども療養支援士の世間の認知や理解はまだまだ発展途上ですが、自分のできる場所から少しずつ、この職種の必要性を発信し続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、私の1年間の研修生活を支えてくださったすべての方々から感謝いたします。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

子ども療養支援士 小野山晶菜
(国立がん研究センター中央病院)

『病院で働きたい』『子どもと接する仕事がしたい』『周りの人を笑顔にしたい』この3つが子どもの頃からの漠然とした夢でした。大学生の時にCLSの活動をテレビで見た時に一瞬でその活動の魅力に惹きつけられました。周りの方々の暖かいサポートのおかげで今回、子ども療養支援士認定コースを受講するというスタート地点に立つ事ができました。念願の切符をいざ手にすると、期待と共に本当に自分のできるのかと不安な気持ちも大きくなりました。しかし一期生、二期生の先輩方、一緒に1年間を過ごす同期との出会いにとっても励まされ、歩み出す事ができました。

講義では、どの先生も子ども療養支援士の実践に繋がるような側面からお話し頂き、とてもわかりやすく興味深いものでした。ディスカッションの機会も多く、異なる背景を持つ同期との意見交換も新たな視点に気づかされ有意義なものでした。病院実習は、大阪府立母子保健総合医療センターを中心に、大阪市立総合医療センター・静岡県立子ども病院と3箇所で行わせて頂き、宮城県立子ども病院には見学実習に行きました。色々な病院を回ることで、病院の中でもたくさんの活動の場があることを知り、働き方も様々だと感じました。その中で、どのスーパーバイザーからも共通して学んだことは、「こどもにとって最善な事は何か」「常にこどもの目線に立つ事」「多職種との連携の大切さ」です。最初は医療器具や処置・検査の場面も初めて見る事ばかりで、戸惑う事も多く自分中心の視点になってしまいがちでしたが、たくさんの子ども達と出会い、子どもの反応をよく見る事で、子どもの不安や気持ちが少しずつ見えてくるようになりました。

子ども療養支援士の活動はマニュアルのような正解のあるものではなく、一人ひとりの子どもや環境に合わせて作り上げていくものです。そのため認定コースを修了し、子ども療養支援士として働き始めた今でも、これでいいのか、もっとできるこ

とがあるのではないかと自問自答の日々です。でもこうした振り返りや反省が、次の支援に繋がっていくのではないかと感じています。

まだまだ子ども療養支援士として小さな一歩を踏み出したばかりで、私の方が子ども達の笑顔に勇気や元気をもらってばかりのような気がします。これからも子どもと家族が安心して医療を受けられるようにチーム医療の一員として役割を担っていき、子ども達とたくさん笑顔を共有していきたいと思えます。



子ども療養支援士 小松朋子
(大阪府立母子保健総合医療センター)

私にとって子ども療養支援士の研修生として過ごさせて頂いた日々は、本当に貴重で学びの多い充実した時間であったと感じております。合格通知を頂いてから、認定コースの修了式を迎えるまでの約1年間は、何にも変えられない私の宝物になりました。多くの方との出逢いとその方々から頂いた助言やアドバイス全てが、今の私の支えになっております。

後期の講義では、前期の実習で得た実践の振り返りや、より内容の深い講義内容に講師の先生方の熱意や思いが後期の実習に向けての励みになり、実習生どうしのディスカッションも前期の講義以上に“子ども療養支援士として働く自分の姿”を見据えた具体的なものであったと思います。

後期の実習では、子ども療養支援士としての視点で日本の文化・社会に沿った考えの上、多職種との連携について考える機会も多く、子どもの目線に立ち続けることをスーパーバイザーは常に教えて下さいました。

今、目の前にいる子どもたちに真剣に向き合い、関わりを通して自分自身の子ども療養支援士としての経験として一つずつ階段を上るように、焦ることなく自分のペースで成長させて頂けたらと感じております。

一人一人の子ども・家族に対して「私に関わらせて

くれてありがとう」という感謝の気持ちを持ち、より良い支援ができるように、今後も謙虚な姿勢で向上心を持ち、初心を忘れずに邁進していきたいと思っております。

私は実習を通して、自分自身の強さと弱さも知ることができました。自分自身に向き合う事で自分の弱さを知り、無理のない自分らしい関わりが着実にできるように、細くでも長く続けていける活動をと願っております。健康管理には十分気を付けて、バランスの良い働き方を行っていきたく思っております。

最後になりましたが、教育委員の皆さま、協会に携わって頂いた全ての方々から心から厚く御礼申し上げます。本当に1年間、丁寧にご指導頂き、ありがとうございました。



子ども療養支援士 蛭田悠子
(北海道大学病院)

子ども療養支援士として認定していただいたから、早くも数ヶ月が過ぎようとしています。新しい土地に引っ越し、新しい生活が始まり戸惑うこともあります。充実した毎日を過ごせることに幸せを感じております。

昨年1年間は本当に多くの方々との出会いに恵まれ、とても貴重な経験をさせていただきました。多くの方が子どもにとっての最善を考え、実践されていることに感銘を受け、自分も頑張らなくてはという想いと、自分にできるのかという想いが交差し何度もしげそになりました。振り返ると、悩み、葛藤することも多かったように思います。けれども、それ以上に学びは多く、子どもたちのそばで仕事をしていきたいと改めて感じる1年間でした。

私は、前半を北海道大学病院、後半を順天堂大学附属順天堂医院で実習させていただきました。北海道大学病院では、成人病棟に入院する子どもへの遊びの支援から、成人病等に入院する子どもの環境を知り、子どもの発達やおもちゃの選び方などを学びました。がん患者さんサロンに参加さ

せていただいたことも大きな学びとなりました。

順天堂では、小児科に所属されているCLSの活動を学び、プレパレーションや多職種との連携、治療的遊びの実践をさせていただきました。5歳の男の子に手術前のプレパレーションを行った翌日のことです。術前の絶食中の時間に一緒に遊んでいるときに点滴に呼ばれました。彼は、スムーズに処置室に向かい、点滴をつけてお部屋に戻ってきた表情は自信にあふれていました。そして、「昨日見たのと一緒だね」と話し、再び遊び始めた様子から、子どものたくましさや処置などについて“知るこ”の大切さを実感するとともに、プレパレーションの普及を願わずにはいられませんでした。

また、実習や講義から、子どもたちは遊びを通して自分の感情を表現・表出し、自らを癒す力を持っていると実感しています。子ども療養支援士として最も大切なことは、子どもたちが自分の力を存分に発揮できるように、安全な場所と年齢に合うツールを提供し、サポートしていくことではないかと思うようになりました。今後、この想いを実践に結び付けられるように、日々努めていきたいと思っております。

最後になりましたが、出会ったすべての方々にも心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。



子ども療養支援士 丸山里奈

(日本心臓血圧研究振興会附属神原記念病院)

研修生として過ごした1年間を振り返ると、実習や課題の全てを終えた時は、あっという間だったと感じていましたが、認定を頂けた今、初めの頃から思い返してみると様々な瞬間がよみがえり、濃く深い1年であったと感じています。

大学を卒業してそのままここに飛び込んだ私にとって、ずっと憧れだったこの職種の勉強が出来ること喜びいっぱいだった日から、修了するまで心身共に鍛え上げて頂いた日々でした。

順天堂大学附属順天堂医院、茨城県立こども病院、大

阪府立母子保健総合医療センターと3ヶ所でも実習をさせて頂きましたが、どの病院でも多くの出会いと学びがありました。その全てで私が感じたことは、困難や、嫌なこと、辛いことなどに立ち向かい自ら克服していく子どもたちの力でした。そして、その力を引き出し、後押ししていく心理社会的支援の重要性を身をもって知った気がします。

実習中、スーパーバイザーの関わり方をシャドーイングして学んだ後、いざ自分自身で考え動くようになると、知識の無さやうまく出来ないことに情けなくなった時期もありました。前期に初めてメディカルプレイを白血病治療中の4歳の男の子と一緒にした時、彼が人形に対して様々な医療処置をして表出しているのに、私自身が治療のことや普段受けている処置をきちんと理解していなかったせいで、何と声をかけていいのかわからなくなってしまい、不安な心持ちのままスーパーバイザーであった早田さんの助けをお借りして、なんとか乗り切ったことは今でも鮮明に覚えています。この出来事は、自分がもっと成長できなければ療養生活を支えることなど出来ないと感じるきっかけとなりました。また、前期から将来1人で働く時のことを考えて動くことを常に意識するように指導して頂いたおかげで、後期の講義では同期とのディスカッションにも積極的に参加して意見や考えを伝えられるようになり、知識と実践を徐々に結びつけていくことが出来たと思います。

現在、まったくゼロからのスタートとなる病院で働かせて頂いていますが、この実習中の学びが私の軸になっていることを感じます。同職種も問わず、心理社会的支援をするスタッフが少ない中で心細さもありますが、研修中にお世話になった先生方、現場で働く皆様に教えて頂いたことを胸に、また困ったらご相談しながら、少しずつ活動を広げていけたらと思います。まずは、目の前にいるお子さん・ご家族と真摯に向き合うことを大事にしている毎日です。

最後になりましたが、この1年間本当にたくさんの方々から支えられ、ここまで来ることが出来ました。心から、ありがとうございました。





前列左から: 修了生蛭田悠子さん、小野山晶菜さん、小松朋子さん、丸山里奈さん、大山えりかさん
後列左から: 子ども療養支援士2期生丸嶋史代さん、1期生オ木みどりさん、2期生本田真己子さん

子ども療養支援士第2期生の活動報告

東京大学附属病院 子ども療養支援士 第2期生 割田陽子

活動を始めた当初は、子どもたちと一緒に病棟の1日を過ごしました。医師や看護師の説明の場に同席したり、保育士の遊びに参加したり、院内学級の見学に行ったり、検査や治療に同行しながら色々な部署を回りました。そのようにして入院中の子どもの体験や思いを子どもの目線で知る活動から始めました。

最近病棟のスタッフから、3歳のY君が「お風呂に入りがたらないんです。」「何か言うとすぐ癇癇を起こすので対応に困っています。」という相談を受けました。様子を見に行くと、Y君は「遊ぶのー!」と泣き叫びお風呂を拒否しているところでした。入院生活が始まり、数日しか経っていないY君にとって、昼間はお風呂より遊びたい時間なのです。病院と家の生活リズムは異なります。一緒にいた家族や友達とは異なる人たちと過ごすことになります。これまでの生活から一変した環境に戸惑い、さらに検査や処置といった体験が加わることで、混乱しストレスを感じている子どもは実際多いです。このようなY君の混乱やストレスを病棟のスタッフに伝えたところ、スタッフがY君にわかりやすい1日のスケジュール表やご褒美シール帳を作ってくれました。保育士たちはストレスを発散できる遊びや楽しく過ごせる時間をいつも作ってくれています。そうやって皆がY君の気持ちに合わせたサポートを行っていったところ、今では楽しみながら検査や処置に取り組む姿が見られるようになり、落ち着いて過ごせています。

当院はどの部署へ行っても子どもたちに温かい眼差しを持ったスタッフが多いです。そのスタッフが困っている事、やれた

いと思っている事に寄り添いながら、子どもの目線で捉えた情報を伝えていったところ、スタッフから「子ども療養支援士が介入するようになり、子どもへの支援がしやすくなった。」という感想や「子ども療養支援士のプレパレーションには専門性を感じる為、当科でも介入して欲しい。」という依頼を受けるようになりました。また、子どもから「楽しかったからまた検査したい。」という感想が聞かれた時は、スタッフと支援の成果や嬉しさを共有し、次の支援の糧にしています。

いつも支えて下さる多くの方々、一緒に働くスタッフの方々に、心より感謝申し上げます。今年度も、皆の役に立てるような支援士に、そして、子どもたちが病院中のどこへ行っても安心しながら、出来た自信や喜びを感じられる場を広げて行ける活動をしていきたいと思っています。

活動報告

1. 病児の遊びとおもちゃケア

今年も平成26年3月9日に成育医療研究センターにて開催されました。その報告を致します。

子ども療養支援士 丸嶋史代

今年で2回目の参加となりました。この『病児のあそびとおもちゃケア』は、内容深い講演や心躍るワークショップなど、頭と心と体で感じられる魅力的なプログラムとなっております。私たち子ども療養支援士は、昨年のブース展示に加え、今年はワークショップにも出させていただきました。ブース展示では、様々な立場で活動をなさっている方々がたくさん訪れてくれ、多くの方と直接意見交換ができる貴重な場となったように思います。また、提供する側として初めて参加したワークショップでは、少し緊張しましたが、手作業をしながら現場でのエピソードを交換しあったり、いらして下さった方から現場で活かせる遊びを教わるのができたりと、和やかな雰囲気の中時間が流れていきました。他のブースを覗いてみても、提供する側も受ける側も皆さんとても楽しそうな表情をしていたことが印象的です。

昨年感じましたが、医療現場に属するスタッフ以外で、同じ目的を持ち活動を共にできる同志がいることに、心強さを感じました。病院の外からの風をたくさん吹かせてくださる皆さんの存在を頼りに、私たち子ども療養支援士は病院の内・外へ視点を向け、こどもにとっての最善を考えられる職種としてさらに精進していかなくてはならないのだと思います。今年もまた、昨年出会った『こどもを支える』たくさんの方々とは再びお会いすることができ、共に学びあえたことを嬉しく思います。ありがとうございました。



2. 「ガイドンス 子ども療養支援」出版報告

“ガイドンス 子ども療養支援” 刊行に寄せて

順天堂大学医学部小児科 田中恭子

日本の小児医療は生命を救うことを主眼に取り組まれ、医療技術も進歩し、一定の成果を上げて来ました。その一方で、医療従事者をはじめとして小児医療に関心のある専門家は、病院という特殊な環境や医療、処置に影響される子どもの成長や心の育ちへのサポートの必要性により早くから気づいていた事実がありました。

1990年代、こどもの病院環境 & プレイセラピーネットワーク (NPHC) の設立から、子どもの advocate としての活動を日本で開始したチャイルド・ライフ・スペシャリストやホスピタル・プレイ・スペシャリストの方々の関連する研究会や協会、法曹における患者である子どもの権利論の発展・啓発、そしてわが国での医療文化を基調にしながら医療に関わる多職の想い一つに誕生した当協会の始動、等、この約20年の時の流れの中における、本著刊行の意義があるであろうと、完成された本を眺めながら感じております。

行く行くは、この領域での動きが、ある程度一つの組織に統合され、その力が大きな流れを作り、全ては子ども一人一人の育ちに還元されていきますように、そんな願いが込められています。

発行にあたり、ご監修を頂いた先生方、ご執筆頂いた先生方ならびに CLS、HPS の方々には心より感謝申し上げます。執筆自体は決して容易なものではなかった筈であるその経緯を踏まえ、各章に込められた各先生方の思いがこの日本の医療に実現されていくことを心から願うのです。

当協会を日ごろから様々な立場で応援して下さる、会員

の皆様ぜひお読みになって頂けたらと思います、刊行のご挨拶とさせていただきます。

医療の本質に革新を迫る本

中山書店 木村純子

私は本書によって貴重な気づきを得ました。医学・医療・看護分野の編集者として、ひとつの分野とテーマを経験してきたつもりでしたが、そのことは、医療のパターナリズムを自ら身体化・常態化させていたのでしょう。

医療における子どもの人権の保護と尊重。そしてその「医療行為」との融合。本書は、これを解決するスキームとして、医療人が変わるだけでなく、医療を知る「非医療人」の参加の必要性を述べています。今まで医療人は、医療の世界における課題を、医療人がその所掌範囲を際限なく拡大することで解決を図ろうとしてきました。患者のためという名目で。それを新たな地平に押し上げたのが本書です。画期的なことだと思います。改めて著者の皆様方に感謝を申し上げます。



第2回日本子ども療養支援研究会のご報告

平成26年6月7日(土) - 8日(日)

東京御茶ノ水 連合会館を会場に、第2回日本子ども療養支援研究会を開催いたしました。

第2回日本子ども療養支援研究会事務局

第2回日本子ども療養支援研究会は、平成26年6月7日(土)-8日(日)に東京:御茶ノ水の連合会館で開催されました。当日はあいにくの雨天でしたが、140名を超える多くの皆様にご参加いただき、盛況の内に終えることができました。

今回は、「子どものレジリエンス～子どもの心の発達という視点を重視したチーム医療を考える」をメインテーマに、教育講演では、「小児医療と子どもの権利」について専修大学法学部教授 家永登先生に、また「子どもの発達の視点を捉えた療養支援～子どもの慢性疾患とストレスコーピング～」について跡見学園女子大学文学部臨床心理学教授 松崎くみ子先生にご講演いただきました。

シンポジウムⅠでは、山地理恵先生(大阪市立総合医療センターHPS)、山口涼子先生(順天堂大学医学部附属順天堂医院看護師長)、渡辺恵理先生(東京大学医学部附属病院小児科臨床心理士)、才木みどり先生(宮城県立こども病院 CCS)、宮本朋幸先生(横須賀市立うわまち病院小児医療センター小児科部長)を演者としてお迎えし、小児医療で働く専門職を代表して「多職種連携のコツ」についてご発表いただきました。

シンポジウムⅡでは、「チーム医療において専門性を発揮する」をテーマに、塩崎暁子先生(長野県立こども病院 CLS)、本田真己子先生(国立がん研究センター中央病院小児腫瘍科 CCS)、高崎菜穂子先生(千葉県こども病院 CLS)、割田陽子先生(東京大学医学部附属病院小児科 CCS)にご発表、ご討議いただきました。

ランチョンセミナーでは、東京大学医学部附属病院こころの発達診療部准教授 金生由紀子先生に「子どものこだわり～多職種での支援～」についてご講演いただきました。また一般演題も10題ご発表いただき、多様な立場からの大変興味深い発表に、質疑応答も白熱いたしました。

さらに、当研究会初めての試みとして初日には「多職種ワークショップ」を開催いたしました。各専門職の専門性を活か

して、子どもの最善の利益を追求することを目的とし、模擬症例について小グループ毎にディスカッションをし、最後に総合討論をいたしました。また、今回は弁護士の先生方にコメントとして各グループにご参加いただき、法的な立場から何ができるか、どんな扱いになるのかを議論の中でご解説いただきました。限られた時間ではありましたが、様々な職種の方と意見交換をする、貴重な場となったのではないかと感じております。ご多忙の中、研究会及び多職種ワークショップにご参加くださった皆様、そしてご講演、ご発表いただいた演者の先生方に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

最後に、多忙な業務の合間を縫って準備や当日の進行にご協力いただきました皆様に、厚くお礼申し上げます。次回研究会はH27年6月に横須賀で開催されます。今回を超える多くの皆様のご参加をお待ちしております。

事務局からのお知らせ

● 年会費の納入のお願い

5月下旬に会費納付状況をお知らせいたしております。未納のある会員の方は下記口座までご入金の際、宜しくお申し上げます。

振込先:みずほ銀行 本郷支店 「普通」2813671 子ども療養支援協会

● 4月からの実習生のご紹介

平成26年度子ども療養支援士養成コースをスタートしました。今年は4名の研修生を採用し、4月開講式を行い、前期の講義を二週間行ないました。5月の連休明けから、大阪府立母子保健総合医療センター(大阪市立総合医療センター、静岡県立こども病院を含む)、順天堂大学小児科(北海道大学病院、横須賀市立うわまち病院を含む)にて実習を開始しました。次号にて、研修生のご紹介をさせていただきます。

● 今後の予定

子ども療養支援協会の行事

開催日	内容	会場
9月24日～10月12日	後期講義	東京
11月中旬	平成27年度実習生募集開始	ホームページ
平成27年3月21日(土)	研修修了式・研修報告会	東京
平成27年3月21日(土)	諮問委員会	

編集後記

過日の研究会では、雨天にも関わらず多くの職種を超えた皆様にご参加いただきました。また研究会に先立ち、「ガイドンス 子ども療養支援」も出版されました。当協会も、3月には第3期生を送り出し、現在第4期生が実習に励んでおります。そして、全国に飛び出した卒業生もそれぞれの地で子ども療養支援士として日々研鑽を積んでいます。そんな日々の活動を思い起こすにつれ、多くの方々の努力の結果、少しずつ、着実に私たちの活動が広がってきていることを強く実感しました。改めて、日頃より本活動を支えてくださる協会員の皆様に心よりお礼申し上げます。(細澤麻里子)

子ども療養支援協会事務局

〒113-8421 東京都文京区本郷2-1-1 順天堂大学医学部小児科 内

Tel: 03-3813-3111 / fax: 03-5800-0216

e-mail: kodomoroyoshien@yahoo.co.jp